

# 平成 30 年 冬季農談会資料

JA おうみ富士

## I 水稲

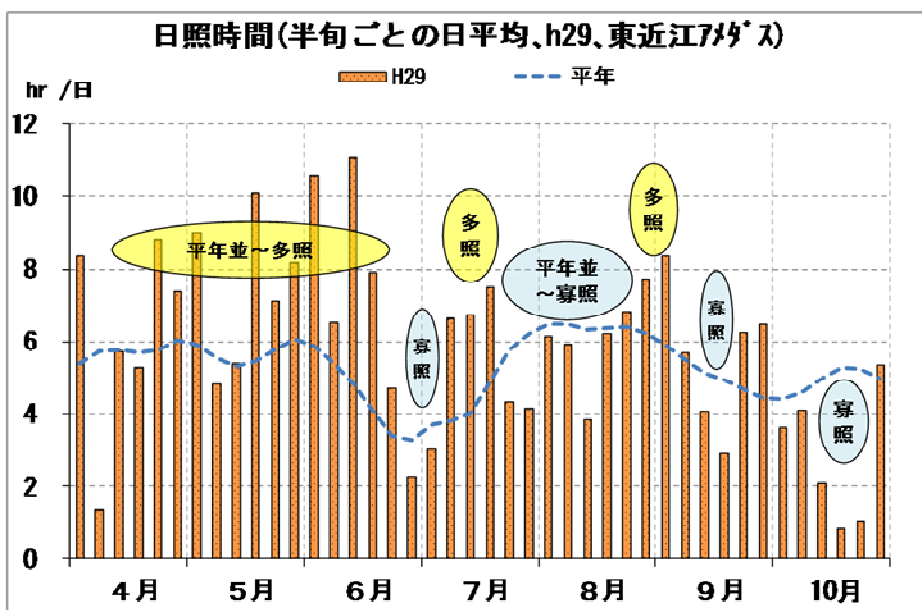
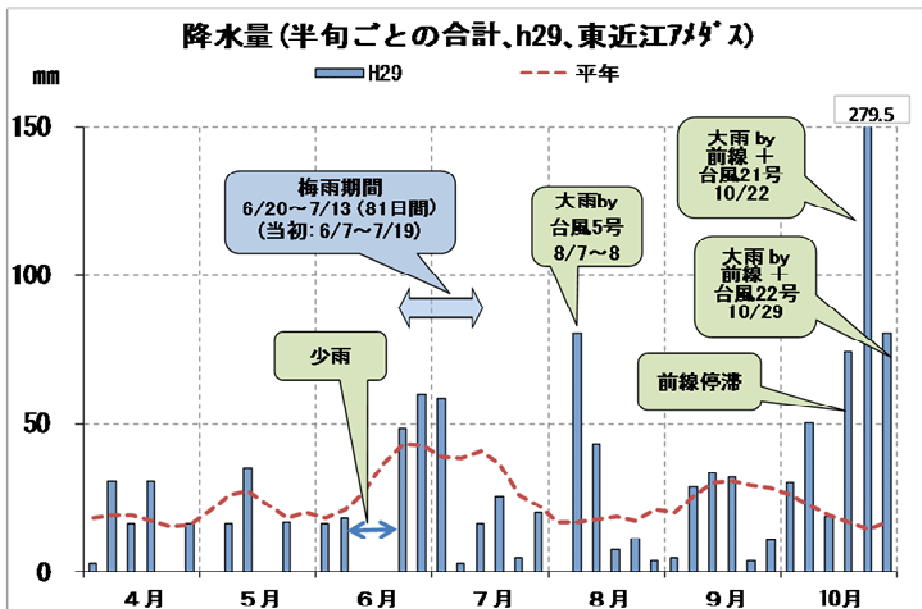
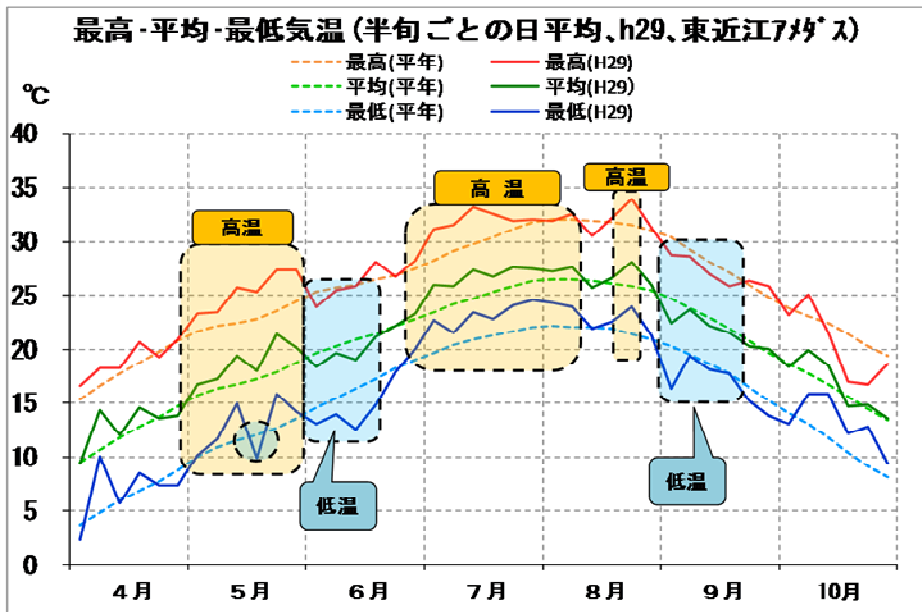
### 1. 平成 29 年産米の概要

#### (1) 気象と生育

- ・ 5 月：平均気温はかなり高く推移したが、5 月中旬の最低気温が一時的に低くなった。
- ◆ 5 月 31 日時点では、草丈は平年並みで、茎数は平年よりかなり多かった。(平年の約 1.3 倍) 葉数は平年より「コシヒカリ」が 0.5 枚、「秋の詩」平年より 0.7 枚多かった。
- ・ 6 月：平均気温は、上中旬低く推移し、特に最低気温は、平年よりかなり低くなった。梅雨入りは 6 月 7 日頃となった。
- ◆ 6 月 30 日時点では、草丈は平年より短く、茎数は平年より多く、葉数は平年並みであった。
- ・ 7 月：気温について、平年よりやや高く推移し、日照時間は平年より多く、降水量は平年より少なかった。梅雨明けは 7 月 19 日頃(平年 7 月 21 日頃、昨年 7 月 18 日頃)となった。
- ◆ 「コシヒカリ」の幼穂形成期は 7 月 2 日で平年より 3 日早く、出穂期は 7 月 29 日で平年より 4 日早くなった。「秋の詩」の幼穂形成期は 7 月 11 日で平年より 7 日早く、出穂期は 8 月 6 日で平年より 6 日早くなった。
- ・ 8 月：気温は、概ね高温となり、8 月 7～8 日の台風 5 号の影響により、上旬の降水量は多かったが、下旬は少なかった。
- ・ 9 月：気温は、上旬は低温となった以外は、平年並みとなった。
- ◆ 出穂期は早かったものの、8 月中旬から 9 月の気温が低かったことから、成熟期は「コシヒカリ」が平年より 2 日、「秋の詩」が平年より 4 日早くなった。

#### (2) 作況指数

1 2 月に発表された作況指数は、全国で「100」(534kg)で「平年並み」となり、滋賀県では「100」(517kg) 湖南が「100」(526kg)で、「平年並み」となった。



(3) 管内の品質（1等比率）の状況

表 - 1 JA おうみ富士の品種別1等比率の推移 ※個袋検査 (%)

区域	品種	H29年産	H28年産	H27年産	対比(H29/H28)
おうみ富士	コシヒカリ	57.1	67.6	62.8	84.4
	キヌヒカリ	48.8	35.2	43.5	138.6
	みずかがみ	71.4	85.5	80.1	83.5
	秋の詩	64.6	77.9	78.5	82.9
	日本晴	35.4	39.7	52.7	89.1
	うるち 計	59.0	64.9	65.3	91.7

今年産の品質概況は、7月19日の梅雨明け以降曇天が8月中旬まで続き、スッキリした夏空がなかったため日照不足が続き、最高気温も平年を下回ったが、夜温が平年より高かったことが、光合成を抑制させ、夜間の呼吸作用が盛んになりデンプンの蓄積不足となり、早生品種に乳白粒、基部未熟粒などの未熟粒を多く発生させた。また、8月7日に台風5号が滋賀県を通過し、出穂に遭遇した日本晴、秋の詩などの中生品種に傷もみ、光沢不良など登熟に影響したと思われる。さらに、カメムシの被害による着色粒が発生しました。

そのような事から、品質は低下しました。

(4) 県内の29年産米品質概要

①早生品種（コシヒカリ・キヌヒカリ・みずかがみ）

コシヒカリ・キヌヒカリは、登熟期に日照不足、夜温の高温からデンプンの蓄積不足から乳白粒、基部未熟粒が発生し、昨年産より品質は低下しました。コシヒカリ1等比率は63.9%（昨年79.2%）キヌヒカリ1等比率は63.1%（昨年64.4%）

みずかがみは、昨年産同様、品質は良かったが限界基準に達していない未熟粒※が多く散見された。1等比率は88%（昨年90.8%）

※未熟粒（乳白粒）とは、白色不透明な部分の大きさが粒平面の1/2以上のものを言いますが、それ以下の粒であったということ。

②中生品種(日本晴・秋の詩)

日本晴・秋の詩は、出穂期に台風5号の影響で傷もみ、充実・光沢不良が見られ、さらにカメムシ被害による着色粒が混入したため品質は低下しました。日本晴1等比率は76.1%（昨年59.0%）秋の詩1等比率は76.1%（昨年84.5%）

(5) 病害虫の発生状況

いもち病は一部で穂いもちの発生があったが、全体的には少ない発生量となった。

紋枯病、カメムシ類は、平年並みの発生量となった。

## 2. 平成30年産の米づくりの取組

### (1) 品質向上対策

近年は、高温と低温、多照と寡照、多雨と寡雨が局在化するなど、特異的な気象が多くなっている。平成30年産においても、こうした気象変動の影響を受けるおそれがあることから、品質低下を防ぐため、下記の技術対策について、これまで実践してきた対策を再点検するとともに、全ての対策が適切に実践されるよう、徹底することが重要です。

#### ① 土づくりの徹底

深耕や有機物・土づくり肥料の施用による土壌管理を積極的に行うことは米の品質を確保するためには、欠かせない作業であり、特にたい肥やケイ酸質資材の投入による土づくりは、他の技術に比べて効果が高い傾向があります。また、深耕を行うことにより出穂期～登熟期における窒素や水分の吸収が高まり、品質確保に貢献します。

#### ② 細植と疎植

1株当たりの植付け本数を2～3本の細植えとし、栽植密度は50～60株/坪を目安に疎植しましょう。細植・疎植栽培を行うことにより、過剰生育による籾数過多を抑え、適正な籾数に対し養分の転流を促すことで、青未熟粒・乳白粒の発生を防ぐとともに粒厚と、整粒歩合を高めることができます。

#### ③ 中干し

茎数の目標が表-2の目安となったら遅れず中干しを行いましょう。中干しを行うと下記のような効果が得られます。

- ・水を切ることにより窒素の吸収を抑え、無効分げつ（実らない無駄な茎の発生）を抑制することにより、稲体の健全化を図ることができます。
- ・ひび割れさせ土中に酸素を送ることにより、根腐れを防ぎ、根を強くはらすとともに、有害ガス（硫化水素やメタンガス）を抜くことができます。
- ・土を乾かし硬くすることにより、収穫直前まで入水し水分供給することができます。

表-2 中干し開始の目安

・60株/坪植	→	1株当たり茎数：17～18本
・50株/坪植	→	1株当たり茎数：20～21本

#### ④ 出穂前後各3週間の湛水管理（カドミウム対策含む）

白未熟粒の発生防止や籾の充実を良くするため、稲が最も水分を必要とする出穂前後各3週間は水不足とならないように常時湛水（水張り）しましょう。但し、水持ちが著しく良い圃場については水を張りっぱなしではなく、定期的に水の入れ替えを行いましょう。

#### ⑤ 出穂後の稲の栄養状態の維持

出穂期の葉色が薄い状態で、登熟期に高温が続くと、炭水化物の合成より稲体の消耗の方が大きく、栄養不足となり品質が低下します。品質向上のためには、葉色を維持させることが重要であり、そのためには、穂肥を適期に適正量（「コシヒカリ・秋の詩」では窒素分量で2kg+2kg）を施用することが重要です。

#### ⑥ 適期刈り取りの励行

近年は温暖化の影響で出穂期～成熟期までの期間が短くなる傾向にあり、収穫適期の幅が短くなっていることから刈遅れによる胴割粒や光沢不足による外観品質の低下が見受けられます。

天候に常に注意を払い、コンバインや乾燥機的能力にあわせた作業計画を組み、刈遅れないよう心がけましよう。

⑦乾燥調製対策

ライスグレーダーの網目が細いと選別不十分により2等以下になりやすくなると共に、実需者からも近江米の評価について粒厚不足との指摘も受けております。対策として、ライスグレーダーの網目や流量を調整し、しっかり選別をしましょう。

⑧高品質玄米生産・調製対策として、1.9米に取り組みましょう。

(ア) 1.9米の条件

個袋、フレコン検査のJA米の内1.9mm網目で丁寧に調製したことを確認した1等米とします。(平成29年度はコシヒカリとキヌヒカリ、秋の詩が1.9米の対象)

(イ) 判定方法

民営検査員が1.9mm網目の缶に検査用カルトン1枚分の玄米を入れ、軽く往復5回振った時、網下が10粒以下であることとします。

表-3 品質向上対策一覧

乳白粒対策 (過剰な粒数の防止と稲体の活力維持)	土づくり	深耕(15センチ以上) 有機物のすき込み 土づくり肥料の施用
	施肥	基肥、追肥の減量(粘質田の場合) 生育に応じた穂肥
	植え付け	遅植え 細植え(1株あたり2~3本) 疎植(50~60株/坪、苗箱15枚~17枚/1反を目標)
	水管理	中干しの徹底 60株/坪植 → 1株当たり茎数:17~18本 50株/坪植 → 1株当たり茎数:20~21本 出穂前後3週間の湛水管理
胴割粒対策		早期落水防止(収穫5日前まで落水しない) 適期収穫(刈り遅れない) 適正な乾燥(高水分粒を急激に乾燥させない)
着色粒(カメムシ)対策		畦畔2回連続草刈り(出穂2~3週間前と出穂期) 品種別に適期に防除(特に「みずかがみ」や中生品種で被害が多いところは注意)

(2) カドミウム対策

カドミウムの含有量が0.4ppmを超えるお米は食品衛生法で汚染米となり、米代金を返金しなくてはならない上に自己の費用で回収、廃棄処分をしなければなりません。平成29年産は含有量を超える汚染米は発生しませんでした。平成30年産以降も、カドミウムを吸収しないよう必ず下記のカドミウム吸収抑制対策を実施しましょう。

- ① 土づくり肥料「とれ太郎」を散布し、土壌PHの適正化(6.5以上)を図りましょう。
- ② 管理対策として出穂前後各3週間の湛水管理(水深約3cmの水張り)を徹底しましょう。

(3) 品種誘導

平成29年産米の品種誘導作付け比率は、主力品種のコシヒカリが30.2%、キヌヒカリ、23.0%、秋の詩が21.8%となり、概ね計画していた数字となりました。今年度も概ね昨年同様の作付面積の維持を目標とし、「みずかがみ」については、販売需要もあることから、県と連携しブランド力の強化、面積拡大を行います。また、多収性品種や実需に基づく有望品種への取組についても積極的に取り組みます。

表 - 4 管内の品種別作付け比率と誘導計画 単位：%

品 種	H 2 9 年実績	H 3 0 年計画	増減(30/29)
コシヒカリ	30.2	30.1	99
キヌヒカリ	23.0	23.0	100
秋の詩	21.8	22.0	100
日本晴	4.0	4.0	100
みずかがみ	5.7	5.9	103
そ の 他	15.3	15.0	98

#### (4) 食味

食味向上対策として、食味分析に取組みました。結果につきましては、表-5のとおりです。

食味値は、アミロースやタンパク質などの含有成分を測定し100点満点で表示されるもので数値が高いほどおいしいと言われ、80点以上がおいしいと評価されます。

また、おうみ富士「米」食味コンテストを昨年引き続き実施します。対象につきましては、「コシヒカリ」「秋の詩」とし、昨年同様「カントリー」「個袋」部門とし、上位各5名を表彰します。食味値につきましては、例年通り、生産者へ通知致します。

※平成28年産「みずかがみ」が一般財団法人日本穀物検定協会の食味ランキングで「特A」に評価されました。

表-5 食味値結果 単位：点

年度	品 種	全サンプル	80点以上	80点未満	平均点
H29	コシヒカリ	2,838	1,138	1,700	78.7
	キヌヒカリ	2,092	249	1,843	73.8
	みずかがみ	401	85	316	76.1
	秋の詩	2,548	1,514	1,034	81.6
	日本晴	249	48	201	75.6
	合計	8,128	3,034	5,094	78.3
H28	コシヒカリ	2,901	2,346	555	85.5
	キヌヒカリ	2,340	892	1,448	78.3
	みずかがみ	352	230	122	80.8
	秋の詩	2,863	1,692	1,171	80.2
	日本晴	260	83	177	76.7
	合計	8,716	5,243	3,473	80.7

#### (5) 「みずかがみ」について

##### 1. 特徴について

「みずかがみ」は滋賀県で育成された品種で、「コシヒカリ」に比べて、極良食味でかつ高温条件下でも玄米外観品質が低下しにくい特徴があります。

平成25年のデビュー以降、気象の影響を受けながらも、他品種に比べて高い1等比率となっています。

##### 2. 平成29年産の状況

○栽培規模 109名 約139ha (2,300名 約2,580ha 滋賀県)

○出荷数量 19,840袋 (JAおうみ富士)

○収 量 約8~9俵/10a (全農調べ)

○検査等級 1等比率 71.4% (88.0% 滋賀県)

### 3. 平成30年産の作付申込について

J Aおうみ富士では、平成30年産「みずかがみ」の共同利用施設（育苗・カントリー）の対応について、育苗センターは29年産同様「みずかがみ」対応を実施し、カントリーについては、野洲カントリーエレベーターのみの取り扱い予定をしています。詳細は運営計画でお知らせします。また、作付けにあたっては、下記のとおり要件がありますのでご確認ください。

#### みずかがみ作付け要件

- ① 近江米振興協会が確保した種子以上の申込みがあった場合は、生産者及び栽培面積の調整に応じること（近江米振興協会宛の栽培申込書を提出すること）。
- ② 環境こだわり農産物の生産計画認定を受けること。
- ③ J Aおうみ富士が策定する栽培基準に準じて栽培すること。
- ④ 全量種子更新し、自家採種は行わないこと。
- ⑤ 種子を第三者に譲渡しないこと。
- ⑥ 出荷にあたっては、1.85mm以上の網目で調整すること。
- ⑦ 出荷にあたっては、農産物検査を受検すること。
- ⑧ 品質・食味分析結果を栽培改善に活かすために使用することを了承すること。
- ⑨ 生産者のすべてが前記①～⑧の事項を誓約すること。
- ⑩ 栽培圃場には、圃場看板を設置すること。

### (6) エコ富士米（環境こだわり米）の変更（追加）について

病虫害雑草防除剤

●エコ富士米栽培では合計使用農薬成分数を7成分以内にしなければいけません。

農薬名	全量	備考	
バッチリフロアブル	500ml	田植直後～ノビエ2.5葉期まで (但し田植後30日まで)	3成分
バッチリ粒剤	1kg		
バッチリジャンボ	400g		
バサグラン粒剤	1kg	田植後15～55日 (但し収穫60日前まで)	1成分
アトトリ粒剤	1kg	田植後20日(稲5葉期以降)～ (但し収穫45日前まで)	1成分
クリンチャー粒剤	1～1.5kg	1kg・田植後7日～ノビエ4葉期 1.5kg・田植後25日～ノビエ5葉期 (但し収穫30日前まで)	1成分
無人ヘリ防除	—		3成分

※無人ヘリ防除を実施しない場合のみ、ダントツ粒剤（1成分）及びコラトップ粒剤（1成分）を施用しても良い。

その他、J Aが認めた農薬を散布しても良い。(無人ヘリ地域外 育苗箱施薬 デジタルコラトップアクタラ箱粒剤(2成分))



(7) 米政策の見直しの概要

経営所得安定対策の見直しの概要

	項目	対象者	H26年産	H27～28年産	H29年産	H30年産
1	米の直接支払交付金	米の生産目標に生産を行った販売農家・集落営農	7,500円/10a			廃止
2	水田活用の直接支払交付金 (対象作物) 麦 大豆 飼料用米 米粉用米 WCS 加工用米 そば、なたね	販売農家 集落営農	麦・大豆 35,000円/10a			飼料用米、米粉用米 55,000～105,000円/10a  H26年産より、そば・なたねは産地交付金へ H29年産より二毛作助成、耕畜連携助成は産地交付金へ
			[県設定] 麦・大豆生産性品質向上助成(団地化型) 6,000円/10a等			
3	産地交付金 県・市で設定	販売農家 集落営農 助成内容によりかわる	[市設定] 戦略作物および一般作物(野菜・花き・果樹等)に対する助成		[市設定] 戦略作物および一般作物に対する助成 H30継続、単価未定	
			[市設定] 戦略作物および一般作物(野菜・花き・果樹等)に対する助成		[市設定] 戦略作物および一般作物に対する助成 H30継続、単価未定	
4	畑作物の直接支払交付金 (対象作物) 麦・大豆 そば・なたね	担い手※	麦 1等Aランク6,410円/60kg		麦1等Aランク6,690円/60kg H28年産比 +280円	
		担い手	大豆 1等 12,520円/60kg		大豆1等 9,940円/60kg H28年産比 ▲2,580円	
		非担い手	○	×		
5	収入減少影響緩和対策 (対象作物) 米・麦・大豆 収入減少額の9割支援 米・麦・大豆の収入を合算)負担割合 国3:生産者1	担い手	経営規模要件 有 加入者のみ		法改正H27.4.1施行 経営規模要件 無 加入者のみ	

※ 米の直接支払交付金はH30年産より廃止されます。

※ 担い手とは、「認定農業者」、「集落営農組合」および「認定新規就農者」となります。

(8) 収入保険制度

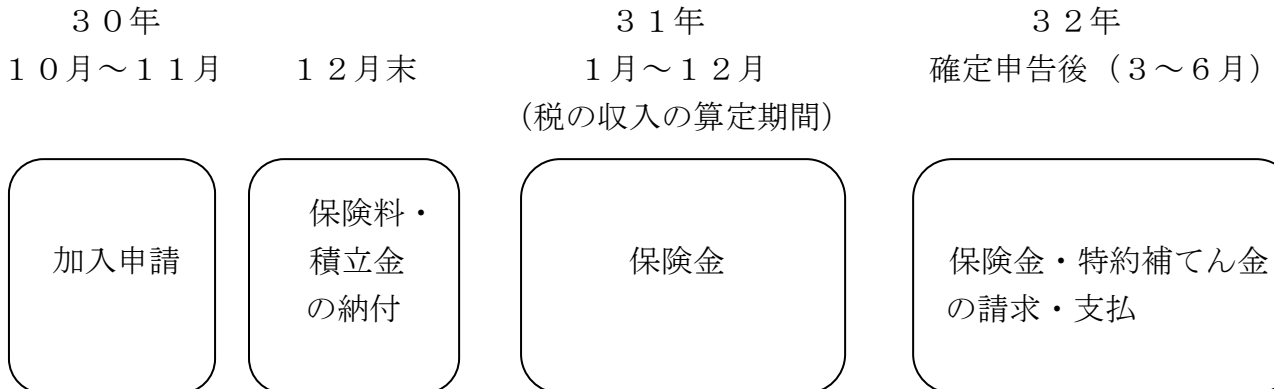
収入保険制度とは、農業経営全体を対象としたセフティーネット対策として、青色申告を実施している全農業者(個人・法人)を対象に、全ての農業経営品目についての農産物の自然災害に加え、価格低下に対応して収入減少を補てんするための制度です。

○青色申告実績が1年以上ある農業者の場合、平成31年1月から、収入保険に加入できます。

○これから青色申告に取り組む場合は、平成30年3月15日までに、税務署に青色申告承認

申請を行います。平成30年分の青色申告実績ができれば、平成32年1月から加入できます。

平成31年1月から加入する場合のイメージ



尚、類似する制度として現行の農業共済・収入減少影響緩和対策（ナラシ対策）との併用はできず収入保険制度との選択となります。自らの経営に最適な制度を適切に選択できるよう、保険料や補てん金などを比較できるように、NOSA I ホームページ上で簡易なシュミレーションソフト（暫定版）で確認できます。

(9) 平成30年度 環境保全型農業直接支払交付金の制度見直しについて

○複数取組への支援の廃止

※平成27年度から開始された複数取組への支援が廃止されます。

※1つのほ場で1つの取組に対してのみの支援となります。

○国際水準GAPに取り組むことが新たに要件化

※GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは食品安全、環境保全、労働安全等につながる取組です。

※GAP理解度・実施内容確認書を提出する必要があります。(詳細な内容については、改めて取組者対象に研修を開催予定しております。)

○予算配分において、全国共通取組への優先

※全国の申請額が国の予算額を上回った場合には、地域特認取組の単価が減額される可能性があります。

※全国共通取組は、カバークロップの作付、有機農業、堆肥の施用の3つとなっており、それ以外の取組は地域特認取組となります。

(10) 米の生産目標について

主食用米の需給バランスをとるために、引き続き、生産調整に取り組む必要があります。市町農業再生協議会から示される主食用米の生産目標を守って、需要に応じた米生産に取り組んでいただきますようお願い申し上げます。

## Ⅱ 小麦

### 1. 平成29年産の小麦について

平成29年産の麦の生育は1月下旬～2月上旬の低温、豪雪による降水量の増加により平年より莖数が少なく、平年よりやや遅い生育で推移しました。4月以降は暖かく晴天が続き、6月7日に梅雨入りしましたが、それ以降も好天が続き収穫期間中に殆ど降雨は無かったため、赤かび粒、発芽粒もなく、粒厚も厚く、充実も良く良い品質でした。

収量については、莖数が少なかったため穂数も少なく荷受け重量は減少しました。また、平成29年度の小麦の品質評価基準(表-6)では、JAおうみ富士の農林61号がAランク、シロガネコムギAランクと評価されました。

表-6 平成29年産 おうみ富士管内の小麦の品質評価実績

	銘柄	タンパク	灰分	容積重	フォーリング ナンバー	評価
	基準値	9.7～11.3%	1.60%以下	840 g /ℓ以上	300 以上	
平成29年	農林61号	10.2	1.65	845	391	A
	シロガネコムギ	10.0	1.51	820	375	A
平成28年	農林61号	10.2	1.67	831	398	c
	シロガネコムギ	9.9	1.46	826	380	A

※Aランク基準 : 基準値を3つ以上達成し、かつ、許容値を全て達成している。

※Bランク基準 : 基準値を2つ達成し、かつ、許容値を全て達成している。

※Cランク基準 : 基準値を1つ達成し、かつ、許容値を全て達成している。

: 基準値を2つ以上達成しているものの、許容値を達成していない。

※Dランク基準 : 基準値を全く達成していない。

: 基準値を1つ達成しているものの、許容値を達成していない。

表-7 品質評価の基準値と許容値

	タンパク	灰分	容積重	フォーリングナンバー
基準値	9.7～11.3%	1.60%以下	840 g /ℓ以上	300 以上
許容値	8.5～12.5%	1.65%以下	—	200 以上

## 2. 今後の管理

### (1) 排水対策

分けつ期の湿害は、莖数不足から穂数不足に至るとともに、根の伸長が不十分となって登熟期まで影響が及びます。そのため、減収だけでなく、品質低下につながりますので排水溝の管理を徹底して排水対策に努めます。

### (2) 施肥

1月追肥以降は、生育を見ながら分施を基本に、穂肥、実肥の施用時期、施肥量（表-8）を調整する。（全量基肥体系）また、小麦のタンパク質含量と容積重を向上させるためには、穂ばらみ期以降に行う「実肥」が重要です。実肥の施肥については、小麦の現地農談会でご説明します。

表-8 穂肥・実肥の施肥時期・量

品 種	穂肥 1 回目 【2月中旬】		穂肥 2 回目 【3月上旬】		実肥 【4月下旬】	
	農林61号	NK-C20 高度化成 444	20kg 30kg	NK-C20 高度化成 444	10kg 20kg	NK-C20 高度化成 444 尿素
シロガネ コムギ	NK-C20 高度化成 444	20kg 30kg	NK-C20 高度化成 444	15kg 20kg	NK-C20 高度化成 444 尿素	20kg 20kg 10kg
品種共通	麦笑	40～50kg				

## 3. 小麦の作付について

米、麦、大豆による水田の活用は農業所得の維持向上には必須であり今後も実需者の求める麦作りに向けた品種誘導を行います。実需者（学校給食）からの要望のあるミナミノカオリについても平成31年度の秋播きからの栽培に向け取り組みます。

### Ⅲ 大豆

#### 1. 滋賀県産大豆について

##### フクユタカ

豆腐としての加工適正は良く、全国的にもっとも生産量の多い品種です。

食用大豆の需要の中でもっとも多いのが豆腐需要であり、その需要先から加工適性・歩留り・味という点で相対的に高い評価を得ている強みがあります。

また、豆乳向けとしても使用されており、今後も相応の需要があるものと思われます。しかしながら、全国的に作付けされているため、産地間での品位の優劣評価が厳しくなっており、高品質・安定生産を目指していく必要があります。

##### ことゆたか

倒伏に強いので浅耕うね立て栽培や不耕起密植栽培などの新しい栽培技術を活用しやすい品種です。ただし、裂莢しやすい傾向があり、収穫適期の幅が短いので注意します。

#### 2. 今後の大豆づくりに向けた取組み

大豆については、「ことゆたか」と「フクユタカ」を中心とした作付が定着しており、今後とも作期分散と品質向上に取り組めます。特に畑作物の直接支払交付金単価（数量払）が検査等級により単価設定されていることから、外観品質である形質の向上に取り組めます。

「ことゆたか」は耐倒伏性が強く加工性に優れていますが、裂莢しやすい特性があり、今後滋賀県において試験栽培の行われている難裂莢性品種への作付転換を検討してまいります。

「フクユタカ」は、排水対策の強化と適期防除の励行、開花期頃の畝間灌水の実施による莢つきの向上と落下防止を図り、大粒生産と増収に効果がある「基肥施用」の推進を引き続き行います。販売については全農しがとの契約栽培を中心に取組み、品質低下の要因となる汚損粒の防止のため朝夕の収穫回避に向けた啓蒙や、広葉雑草が多い圃場については刈取り時の草汁による汚損粒防止のため、後期除草剤散布など指導に取り組めます。

## 園芸作物

### ○たまねぎ

#### ・ベト病

糸状菌（カビの一種）が原因で発生する病害。 土壌中の休眠胞子は、10年以上生存する。排水対策を徹底し、予防防除を行う。

時 期	感染や発病	対 策
2月下旬から3月	感染している株（越年羅病株）が発病し、感染源になる。気温15℃前後で発病する。3月上中旬から注意が必要である。	越年羅病株は、発見次第抜き取り処分する。予防防除を中心に早期防除に努める。
4月以降	越年羅病株の周囲の株に2次感染し、4月上中旬以降に発生が拡大する。	定期的な防除を行う。雲雨天が続いた時には、晴れ間を見計らい防除を行う。

予防剤・・・           ダコニール1000 1,000倍 6回以内 収穫7日前まで

予防・治療剤・・・ ベトファイター顆粒水和剤 2,000倍 3回以内 収穫7日前まで

※たまねぎは水をはじくため、薬剤効果を高めるには必ず展着剤を併用すること。

グラミンS

機能性展着剤ならさらに効果アップ   アプローチBI

#### ・とう立ち

たまねぎは、一定の大きさに育った状態で、寒さに1ヶ月～2ヶ月当たると花芽分化させる性質があります。とう立ちすると、開花するために養分を使ってしまい、球の肥りが悪くなります。要因としましては、種を早くまきすぎた場合・暖冬で進みすぎた場合、追肥の量が少なかった、追肥を施す時期がずれた場合等があります。 対策としては、適期に植え付けを行い、追肥は早生や中生は2回、晩生は3回（目安として1回目は12月中下旬頃、2回目は2月上中旬頃、3回目は3月上旬頃）施用する必要があります。

### ○果樹

越冬病害虫が、翌春以降の発生源となるため、冬期防除でこれらの密度を抑えることがポイントとなります。

### ○かき、みかん

- ・落葉やせん定した枝を適切に処理し、病害虫の越冬場所を減らします。
- ・鎌等を使って、古くなった粗皮を削りとること。害虫の越冬場所を減らすことにつながります。
- ・越冬病害虫に効果のある薬剤を散布します。

みかんは、12月下旬～1月中旬、又は3月に散布します。

かきは、12月下旬に散布するか、芽の動きだす前に散布します。

防除剤・・・ トモノール（マシン油）機械油乳剤 95（カイガラムシ類、ハダニ類、サビダニ）  
みかん（かんきつ） 冬期 30～45倍 夏期 100～200倍  
かき（落葉果樹） 16～24倍

・みかんの防除（4月～5月）

アブラムシの防除

みかんの新芽にアブラムシが発生して放置しておく、みるみる増殖し、後にすす病（葉が黒くなる）の原因になりますので定期的に防除します。梅にもアブラムシは多発します。新芽が縮れたりするのはアブラムシが原因です。みかんと同様定期的に防除します。

防除剤・・・ スミチオン乳剤 1,000～2,000倍 5回以内 収穫14日前まで

また、カイガラムシもすす病の原因となります。6月及び8月にスプラサイド乳剤を葉の裏まで十分かかるよう、防除します。

防除剤・・・ スプラサイド乳剤 40 劇物 1,000～1,500倍 4回以内 収穫14日前まで

・アメリカシロヒトリの防除（被害が多い木 カキ、サクラ、ヤナギ、ハナミズキ等）

カキやサクラの木の葉をあっという間に食い尽くしてしまう食欲旺盛な毛虫アメリカシロヒトリが最近管内で発生しています。葉を食い尽くせば樹から降りて、他の野菜等も食べてしまいますので、発生初期に防除しましょう。

・ふ化した幼虫は、白い網状の巣網を作り、葉に群生しています。

約2週間後には巣網から出て、分散し葉を食べ尽くしますので、早期発見、早期補殺防除をお願いします。

年2回、6月上旬～7月中旬 8月上旬～9月中旬

カキ	防除剤・・・スミチオン乳剤	収穫45日前まで	3回以内	1000倍
サクラ	防除剤・・・ジェイエース水溶剤	発生初期	5回以内	1500～2000倍

農薬散布の際、白い網状の巣網の時は巣を破るように噴霧器の先を緩め、鉄砲状にして散布する方が効果が高い。

注意点 散布時期が遅れると薬害につながります。

※劇物の購入には印鑑が必要です。また劇物の配達はできません。

※代表的な薬剤を掲載しております。

※農薬のお問い合わせは、各営農センター営農購買課にご確認下さい。

## ○白菜、キャベツの根こぶ病対策

根こぶ病は、白菜やキャベツを栽培していて晴天日には日中、葉がしおれ、夜間、曇天日には回復し、その被害株を引き抜くと根に大小不揃いのコブが多数できる病気です。一旦かかるとほぼ致命的で、酸性土壌や地下水位の高い所で多く発生が見られます。対策としては排水をよくするとともに消石灰を施用し酸度矯正を図るとともに、植え付け前にフロンサイド粉剤を3kg/1a全面施用します。尚被害株を放置しておくとも病原菌はそのまま越冬しますので早期に除去します。

## ○大根のす入り

す入りは、生理現象です。内部の細胞がだめになり、スポンジ状の空洞ができます。

原因・要因

- ・播種時期が8月等早いと成長期が高温となり根の生育（肥大）が早いため（9月中旬程度が良い）
- ・肥料切れ、水分不足 ・収穫遅れ
- ・生育期に高温であった場合、株間を広く取りすぎた場合、窒素・カリ過多の場合

## 2～3月の野菜作業ポイント

### ○にんじん

3月下旬、春にんじんの種まきです。春まきは本葉3～5枚時に低温にあたると花芽ができてしまうので、トンネルで保温します。発芽には十分な水分が必要ですので発芽までしっかり灌水します。

### ○じゃがいも

3月下旬、あまり早植えすると遅霜に当たって地上部が枯れてしまうことがあるので、早植えは避けます。

### ○いちご

3月になったら雑草の発生と果実の汚れ防止のため黒マルチをします。マルチは降雨後に実施すると水分保持ができます。

### ○キャベツ

雨除けハウスなどを所有されている方は、3月上旬に播種、育苗後定植すると7月上旬に収穫できます。収穫時期が高温となるので作りすぎは禁物です。

### ○ほうれんそう、小松菜、水菜

葉物野菜の播種ができます。簡易ハウスやトンネルがあると早まきが可能です。

## 夏野菜の土づくり

○野菜の多くはPH6.0～6.5の弱酸性でよく育ちます。ほうれんそう、葱類はやや高めを好み、さつまいも、じゃがいもなどのイモ類は酸性を好みます。石灰類の施用は100g/1㎡とし、イモ類は半分程度にします。

○夏野菜の収穫を長く楽しむには、地力をつけます。堆肥などの有機物を施用します。

2kg/1㎡が目安です。未熟な堆肥は生育不良を招くので、完熟たい肥を施用するか、前もって早目に施用します。

○排水を良くする為、ほ場周りに排水溝を掘るか、高畝にして排水性を確保します。

○連作を防ぎます。トマトとじゃがいも、なすなど同じ仲間の野菜が植わっていないところに植え付けるようにします。

○ほ場が狭く、どうしても連作となる場合は、接ぎ木苗などを活用しましょう。